

静脩

2005年10月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 42. No. 1

京都大学図書館機構発足への期待

京都大学総長 尾池 和夫

大学の図書館は、大学の知的シンボルであり、大学の文化バロメータでもあります。京都大学の図書館も、知の創造場所として、また、知の宝庫として、さらに、知の継承場所としての重要な使命を担い、大学の歴史とともに図書館の歴史も作られてきました。この歴史の流れの中において、図書館は、教育支援と研究支援が本来の一番大きな課題でしたが、利用者のニーズにどう応えるのかを常に検討いただき実現していただきたいと希望いたします。

とりわけ、学生に対してのサービス向上について、図書館においても全学を挙げて取り組んでいただきたいと思っております。また、図書館そのものについても、紙媒体資料を使用した従来型の図書館サービスだけでなく、インターネットの活用とIT技術を使用した情報提供サービスを融合させたハイブリッド型の図書館サービスの展開に京都大学の図書館が連携して取り

組み実現していただきたいと期待しております。

京都大学は、幾たびか変革の時期を迎え乗り越えてきております。今日また、新たな一つの波に直面しています。先人達が難局を克服し、今日の京都大学を作り上げたように、勇気をもって打開していく使命を、今、京都大学にいる私たちが担っています。京都大学の図書館も機構という新たな枠組みの中で、教育、研究、社会への貢献の任を果たしていただけることを期待しています。



(おいけ かずお)

京都大学図書館機構のウェブサイトを新しく公開しました。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

従来の附属図書館ホームページのURLは変更になりました。

<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

<一冊の本シリーズ 1>

心に森を築く一冊の本

フィールド科学教育研究センター教授 田中 克

最近、読書を楽しむ時間も限られているだけに、余り悩まずに1冊の本を推薦できる。「日本汽水紀行―森は海の恋人の世界を尋ねて」(文藝春秋社、2003)である。第52回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した漁師の生命力とロマンに満ちた名著である。

日本は世界的に希に見る豊かな自然に恵まれ、地域の自然に駆け込んだ多様な文化を発達させてきた。ところが20世紀後半の科学技術の急速な進展は、ひとり人類のみが自然を支配できるかのごとく、目の前の生活の利便性と経済効率を優先させてしまった。結果は、修復不可能なほどに自然にダメージを与えることとなった。加えて、地域文化と人々の心にも深い傷を与え、今日の“病める社会”を生み出してしまったように思われる。日本の自然を特徴づける森と海、そしてその連環の再生や“つながり”の価値観の形成を目指した新たな統合学問領域「森里海連環学」創生への思いを深めている。

この「森里海連環学」の原点のひとつが、宮城県気仙沼湾で取り組まれている“森は海の恋人”運動である。それは畠山重篤氏(牡蠣の森を慕う会代表)ら漁師による植林活動として、中学校の国語や社会の教科書にも登場するほど社会的に注目を集め、今では“日本再生のシナリオ”という世論にまで高まりつつある。畠山さんは、文筆分野でも非凡な才能を発揮されているが、本業はまぎれもなくカキの養殖漁師である。カキは川の恵み(栄養塩)によって河口域で大量に発生する植物プランクトンを餌として成長し、その養殖は肥料や薬を一切使わずに自然のままに大きく

育てるものである。カキの生息場所は“汽水域”と呼ばれる川と海の境界域である。気仙沼湾に注ぐ大川源流の室根山に植林を続け、海を見たことのない山の子供達の臨海自然教室を通じて、流域の環境意識を大きく変え、おいしいカキやホタテガイの生産を復活させている。この“森は海の恋人”運動は、人々の“心に森”を築く教育活動でもある。畠山さんの柔軟な発想の原点は、汽水という“境界”に暮らしていることにある。これまでの社会はこの大切な境界を無視し、それらを分断する方向で経済効率を求めてきた。この運動は、縦割り社会の仕組みや型にはまった融通性のない思考を打破する挑戦とも言える。子供の頃に日々汽水域に遊んだ「原体験」と、人と自然へのつきない好奇心が自ずとそのことを可能にしているように見える。

本書は、東京湾・四万十川・有明海など全国津々浦々の汽水域を巡り、地域の気候風土の中に根付いた“汽水文化”を掘り興した紀行文である。自然の織り成す絶妙の調和も、地域独特の文化も、“歴史”のたまものであることを、鋭い自然への観察力と歴史を継承する人々への共感をもとに語りかけている。人間社会にとってはいわば“免疫力”のような存在である地域の自然と文化を再生したいとの熱い思いにあふれている。これから自らの世界を拓き、様々な分野で活躍しようとする学生さん達にとっても、自然と自然や自然と人、そして人と人の多様で絶妙のつながりの大切さを考える素材になるに違いない。

私が所属するフィールド科学教育研究センターは、畠山重篤さんを「社会連携教授」(非常勤)に招へいし、夏休みには気仙沼水山養殖場

において、ポケットセミナー「森は海の恋人の故郷に学ぶ」を開講する。私も“受講生”の一

人として、この「汽水人」から心に森を築く意味を改めて学びたいと願っている。

(たなか まさる)

『附属図書館セレクション』

京都大学の特色ある貴重なコレクションの常設展示

附属図書館は、図書館資料（図書）を約87万冊所蔵しています。二階には、開架図書を約9万冊配置していますが、全体の10%程度に過ぎません。残りの90%の蔵書は、地下書庫に収蔵しています。これらのうち一般の書庫内資料は、OPACなりカード目録で検索して、カウンターに請求し、ご利用いただいておりますが、貴重資料等は日頃日手に取ってご覧いただくことが難しいものです。

この度、これらの書庫内資料から、京都大学の特色を示す貴重な資料で、学外の展示会等でよく利用されているものを、『附属図書館セレクション』として一定期間常設展示することとしました。

京都大学の誇るコレクションの素晴らしさをご鑑賞ください。

【第1回】幕末京都の尊攘堂セレクション

平成17年6月～8月

第1回目は、明治維新後に子爵品川弥二郎が全国の勤皇志士に手紙で呼びかけて収集し、四条高倉通にあった尊攘堂において展示した勤皇志士たちの墨跡などを中心としたコレクション「維新特別資料」（尊攘堂資料）から10点を展示しました。

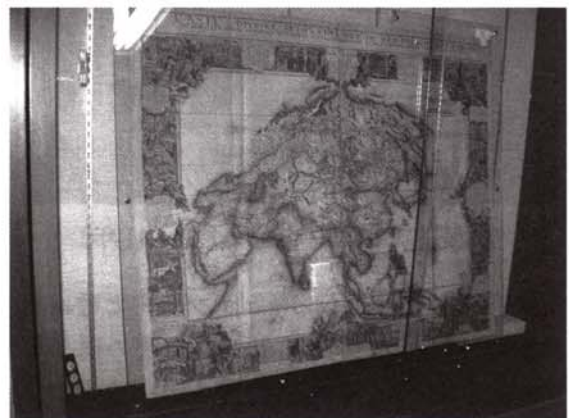
【第2回】古地図セレクション

平成17年9月～11月

第2回目は、平成8年度大型コレクションで購入した「古地図及び地理学文献コレクション（室賀信夫コレクション）」などから4点を展示しています。



幕末京都の尊攘堂セレクション



古地図セレクション